

ジクムント・パウマン著

『リキッド・モダニティ～液状化する社会～』

§ 3 時間／空間

P119 ジョージ・ヘイゼルドンの“ヘリテージパーク”

- フェンス、柵、カメラによる監視、警備員によって世界の危機や危険からしっかり守られた、共生を監視し管理したいという個人の要請に合わせて作られた都市。

本質＝共同体…厳しく監視された領域

ストーカーなど迷惑な人間を処罰し、部外者を侵入できなくする。

【住民を安全への不安から解放する】

・過去の共同体

・現代＝共同体の模倣

生活者により自然に発生

カメラ・検問所・武装警備員で領域監視

P123

内容でなく、注意深く監視された境界によって定義される共同体。雇われた武装警備員による出入りの管理と解釈される「共同体の防衛」。公衆の敵の中でも、第一にランクされたストーカー。限られた人間だけが近付ける、守られた区域へと矮小化された公共の場。共通性を探すことなく、差異を処罰し、分離する態度。これらは都市生活の発展とともにあらわれた、いくつかの顕著な状況である。

P124 見知らぬ者が見知らぬ者と出会うとき

リチャード・セネット（アメリカの社会学者・都市社会学）

“都市は「見知らぬ者同士が出会う共同体」である。”

（偶然でその場限り、共通する過去も未来もない出会い）

- ・そこで見知らぬ者と関係を持つとき、たよれる支えを相手の外見・言葉・しぐさから自分で作りださなければならない。

⇒『市民性』が双方向的に追及される、都市環境の要素であることが必要。

📖 市民的であることの要点は…

見知らぬ者と関係をもつとき、見知らぬ者を他者たらしめる変わった点・特徴（差異）を欠陥と考えず、それを矯正しようとしめないこと。（p137）

○都市環境が「市民的」であるとは…

1. 公的ペルソナとして、人々が共有できる空間をそなえた環境
(私的な自分自身をさらけ出すことが勧められも強制されもことがない)
2. 共通利益が個人的利益の総計をこえる環境
(個人の努力を足しただけでは達成できない目的を共有している環境)

↓

○市民的でない「公的空間」(現在)

1. ラ・デファンス (ミッテラン元仏大統領が発案した巨大な広場)
↳ 通過と即刻の退去を唯一の目的とし、接近を制限し、迂回を勧める「立ち入り禁止区域」(p133)
2. 消費者のための空間
↳ 人々が、消費するために共有する空間。
※消費は私的のみに経験される感動なので、消費者どうしの相互関与はジャマ
…干渉しようとする人間(ストーカーなど)からしっかりと守られている空間。

嘔吐的空間、食人的空間、非空間、空虚な空間

P128

消費空間＝「異次元」、日常では獲得しがたい存在様式がある。

【純化された空間】

…他者との差異は存在するが、それが消費者の視界から隠され、意識されない

⇨「われわれはみな同じで、話し合う必要はない」

理想的共同体の連帯、アイデンティティ共有の感覚をもつように仕組まれている。

クロード・レヴィ＝ストロース (仏・社会人類学者・思想家) 『悲しき熱帯』

○市民性が欠如したなかで、他者との差異に対処する方法

P132

I. 嘔吐的方法 (ラ・デファンス)

- ・他者を体外に出し、他者との物理的接触を禁止する方法 (他者の追放による抹殺)
(ex) 投獄、追放、殺害、空間的隔離、空間的接近の制限

II. 食人的方法 (消費のための空間)

- ・異質な肉体・精神を「摂取」し、食べた人間と同化させる (他者性の帳消し)
(ex) 文化強制、地方的習慣の撲滅運動
(※レヴィ＝ストロースの二文法はここまで)

III. 「非空間」

- ・人が定着も同化もしない空間 (嘔吐的方法との共通点)
- ・通過する他者を、定められた公的行動の規範に従わせる ⇨ 差異を無効にする
(ex) 空港、高速道路、公共交通機関、個性のないホテルの部屋

IV. 「空虚な空間」

- ・意味を持たず、意味を持つことさえ期待されず、空虚だと思われているから意味がない。差異をもつ他者がいない。

(ex) 都市計画から忘れ去られた周辺、空間地図 (頭の中の地図の空白地帯)

P137

見知らぬ人に話しかけるな

以上4つ

「公的でありながら市民的でない」場所の特徴…相互関与は不要とみなす点

《前提》空間の共有として、見知らぬ人との物理的接近は回避できない

→《次善》見知らぬ者との関係を断絶する、無関係性を貫く。

※すぐれた解決法に見えるが、リスクがある!!

- ・差異を享受し、差異から共通利益を生む能力。差異と共存する能力(市民性)
…獲得に手間と鍛錬が必要。
- ・人間の多様性、分類/整理からはみ出たあいまいさに向き合う能力の欠如
…永遠に自己増殖

上記4つの方法で、「公的空間」の差異解消への努力がなされると…

↳他者の差異がますます脅威に感じられ、他者への恐怖が増す。

↳共同体的均質性、単調さのなかに逃げ込む。

↳他者と共通利益をわかちあう技術は使われなくなり、習得されない。

↳共通の幸せ(利益)が疑われ、否定される。

【共通の利益より、共通のアイデンティティによる安定を求める】

アイデンティティとして最も有効なもの

…『民族性』=分離された領土への帰属権

政治的領域…

- ・私生活の公開、個人的美德・欠陥の公的詮索の場
- ・政治とかいかなるべきかという問題➡公的人間の信頼性への関心
- ・よき社会への展望が政治的言説から抜け落ちる
- ➡政治が、利益よりアイデンティティの方が大切だと強調する宣伝行為に変化
リチャード・セネット

やがて、「共同体の維持が目的に変わり、帰属しないものを一掃するのが、共同体の任務になる」

➤共同体論の復活

「公的空間」や政治的危機にたいする理性的反応の一形態

時間の歴史としての近代

P143

《近代以前》

- 近い⇨すぐ 遠い⇨長い：一定の距離の移動、一定時間の作業の大変さを示す
- ・人間の生活・労働の中で時間と空間がほとんど同一のものとして扱われていた。
 - ⇨「生き物」の力を利用…作業効率の差異が決定的でなかった。

《近代》＝時間の歴史

生き物以外の輸送手段・高速機械があらわれる

- ⇨(移動にかかる)時間：人間が発明、使用、管理する「機械」の問題
- …時間＝変化させ、操作できるものになる。

【時間を道具として、空間を征服する】＝近代の開始

- 加速した動き⇨より広い空間の獲得、空間拡大の唯一の手段。
- (高速で動ける者がより広い領域を獲得、支配できる)

重い近代から軽い近代へ

P148

重い近代（ハードウェアの時代）

- ・空間の制覇が究極の目的
- ・富と権力は土地に根ざし、領域の拡大によって成長し、領域の防衛によって維持
- ⇨大きければ大きいほど効率的「大きいことはいいことだ」
- 【重い近代において、進歩は規模拡大、空間的拡張のことであった】
- 征服された空間…時間の規則性をもたせる⇨空間を「所有」できる
- (単調に流れていく時間)

「フォード主義的工場」（重い近代で最も頻繁に採用されたモデル）

労働者…規則化された時間に縛られて、動けない。

⇕

資本…監視・管理のために、巨大な工場、機械設備、労働者に縛られる
(労働者と資本の両方が移動性を奪われる＝永遠に続く婚姻関係)

軽い近代（高速移動のソフトウェア）

【時間ではなく、空間が無意味になる】

ゲオルグ・ジンメル（ドイツ出身の哲学者・社会学者・『生の哲学』）

“価値を得るにあたっては、乗り越えなければならない障害があり、価値を価値たらしめているのは「価値を得るためになされる努力の密度」である”

- ・すべての空間に全く時間をかけずに到着できる。
- ⇨努力としての時間がないため、空間に価値を付加することができない
- (特権的な場所、「特別な価値」をもった場所が消滅する)

マックス・ウェーバー（独・社会学者・経済学者「理解社会学」の祖）

《重い近代》

時間は価値（空間）の獲得を最大限にするため、賢く節約され管理されるべき手段であった。

《軽い近代》

価値獲得の手段である時間の効率化は極限をきわめ、すべての目的において、すべての価値が均等化されることになった。

P154 存在の魅力ある軽さ

ソフトウェア世界

<時間的距離> = 目的地に到着するのにかかる時間

↳ 「瞬間」（広がりのない点）となる。

※完全に「瞬間性」が獲得されたわけではないが、それが社会のあらゆる場面で標準化されている。

ミシェル・クロジェ

支配者の資格 = 「不確実性に近づくこと」

みずからは行動を標準にしばらせず、予想外の行動をしながら、他者の行動は基準に従って規制する（あるいは、ルーチン化し、単調で、明白な繰り返しとする）人間が支配者となる。（p156）

↓

軽い近代

支配者の資格 = 瞬間性に近づくことに集約化される

どこか「よそへ」逃避し、撤退していける能力、そのスピードを自由に操る能力を確保する一方、逃げ回る人間の動きをとめ、捕まえる能力を被支配者から奪うことが支配力の源泉である。

【瞬間性（すばやさ・身軽さ）が支配の原型・社会的区分の主要素となっている】

○ 資本と労働者の関係

【資本がすばやさ・身軽さを獲得】

労働者…労働が「非肉体化」したが、資本にまだ依存している

↑

資本…労働が「非肉体化」したことで、労働にもはや縛られず、
非地域的で、変化に富む、移ろいやすいものとなった。

労働の非肉体化

《重い近代》

労働 = 労働者を物理的に動かさなければ出来ない（肉体的）

↳ 労働・作業過程を管理するために、労働者を管理・監視しなければならない。

➤ 労働者の訓練・監視の機能をもった施設。固定した労働者を雇う。

《軽い近代》 p196 あたりを参考に…

労働＝だれでも簡単に操作できる普遍性を持った機械による

(ex)組み立てライン、電算機ネットワーク、レジ（電子オートメーション）

↳労働者が訓練・監視されている必要がなく、労働する人はどこの誰でもよい！

【労働の非肉体化】 ⇨資本が土地にしばられる必要がなくなる。

—（以上、補足でした）—————

軽い近代

「すばやさ・身軽さ」が重要！

↳資本の動きを束縛する「大きさ・規模」はジャマになる。

(ex)多数の従業員の管理・監督 etc…

↳経営のスリム化・規模の縮小（合併）

⇨労働者：いつ首になるかの不安におびえる

身がひきしまつて、浮揚力のある、脱出奇術名人型の資本は、口実と逃避、長時間の関与とともなわない短期的取引と、一時的な関係、「撤退」とつねに選択肢として残す方法を、支配の主要な手段としている。

瞬間生活

アンソニー・フルー

P161

“死なないというのは、永遠の命の選択というより、カルペ・ディエム（今を楽しめ）的生き方の選択、永遠存在に興味がないことの宣言でしかない。

…いま、この瞬間の生き方が「永遠の経験」に変わるのだ “

軽い近代

瞬間性の獲得によって、各瞬間の容量が無敵大になる。

↳各瞬間からしぼりとれるものに限界がない。

「永遠」でも、「瞬間」の間でも、得られるものは同じ無限大。

↳流体的近代にとって、継続性（永遠性・長期性）は無価値となる

○一過性、使い捨て、短期、

×永続性、連続性、蓄積、長期

瞬間性…人間の共生形態・集団的事象との関わり方を変化させた。

(ex)政治過程での「公共選択論」（政治＝自己利益の追求）

鹿狩りの逸話（猟師の集団…鹿ではなく、各人ウサギを狩る）

【軽い近代における「理性的選択」】

↳満足を追求しながら結果を回避すること、結果にともなう責任を回避すること。

【軽い近代における、主要な文化的象徴】

↳贅肉のないからだと俊敏性、身軽な服装とスニーカー、携帯電話、
もちはこび便利な使い捨ての所持品